

史料紹介と研究

国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』所収「二条良実似絵写」
博物館所蔵

— 列影図の伝来に関連して —

藤原 重雄

国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』は、幕末から明治初年にかけて、東灘（旧住吉村畷田）の豪商・吉田家三代によって蒐集・整理された好古図譜である。藤原貞幹の『集古図』の分類を基礎とし、手鑑状にした全六四帖に、拓本・模写・摺物、あるいは史料現物が貼り付けられている¹⁾。同館における企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」（二〇二三年三月七日～五月七日）開催のため準備中であるが、関連する資史料が多岐にわたり、展示ではご披露しきれない。ここではごく小さな覚え書きを示し、『集古帖』の世界の一端をご紹介します。

『集古帖』の「肖像」帖には、古人の肖像および絵巻からの抜き描きが集められている。院政期から鎌倉時代の貴族の肖像（似絵）を集めた列影図も収められ、二条良実（福光園関白…一二一六～七〇）の肖像が抜き写しされている【13頁】。図に添えられた注記を示す。

良実公像 大臣似絵の抜うつし物也、仲公写本狩野家本也、

大臣似絵下／関白良実公／二条殿元祖

大臣似絵下／惣略也、／以入道宮御／本写之、／永禄六十二廿四

久我大納言通尚卿以絵本写之、／採色土佐将監入道経光

宝徳三年十月日

最後の本奥書にみえる「土佐将監入道経光」は、絵師・土佐行広の法名で、興聖寺所蔵「涅槃図」の画面に「土佐守入道法名経光筆」の落款があ

り、裏書の寛永十七年（一六四〇）修補銘によって、宝徳三年（一四五二）の制作と判断されている²⁾。この事例は行広の作画活動の終見となっており、『集古帖』の注記は、同年の行広の記録に加えることができそうである。行広の初見は応永十三年（一四〇六）で、最晩年となるが、藤原隆信・信実の家系による似絵様式の作品に直接触れていた可能性が高い。「採色」とわざわざ注記するのは、親本が白描や淡彩、あるいは京都国立博物館所蔵「公家列影図」のように服飾は略画であったなどの事情も想定される。久我通尚は時に権大納言で、寛正二年（一四六一）に内大臣に昇り、文明五年（一四七三）には將軍足利義尚の元服にともなって名を通博と改めているから、この本奥書には同時代性が認められる。奥書の通例として、久我通尚が所持する絵本を転写したと読むのであろう。宝徳三年以前にも通尚―経光の組み合わせは成り立ちうるが、宝徳三年のことと理解して良い。

この『集古帖』に収められた写しは、宝徳三年の経光彩色本を、永禄六年（一五六三）に、さらに転写した本からの抜き写しとなる。永禄写本の親本の持ち主であった入道宮とは、伏見宮の貞敦親王である³⁾。貞敦は天文十四年（一五四五）に出家するも、息の邦輔親王がこの永禄六年三月二十六日に亡くなってしまい、同年十二月二十一日に孫の貞康を元服させて親王宣下を受けており、貞敦が家督を預かっている時期に相当する。奥書には十二月二十四日とあって、この画巻が転写された契機には、伏見宮家の家督継承に伴う家産の点検があつたと想像される。

永禄写本の親本が伏見宮家にあつたとすれば、宝徳奥書の書き様は、いかにも後崇光院貞成親王（一三七二～一四五六）のそれを彷彿とさせる。『看聞日記』の日記記は文安五年（一四四八）にて終わるが、それ以降にも後崇光院の絵巻披見は確認され、サントリ―美術館所蔵「放屁合戦絵巻」奥書「定智筆、以御室絵本写之、／文安六年五月日」、陽明文庫所蔵「儂絵」（いわゆる『信西古楽図』）奥書「三条宮書 御室絵／舞銘 当今宸筆／宝徳元年九月日」、宮内庁書陵部所蔵『粉河寺縁起』（七卷本詞書）奥書「宝徳四年三月日、馳筆書写訖、／僻字僻書如本也、」【14頁】は後崇光院の筆跡で類例

となる（ただし「本云」の性格は異なる）。後崇光院が絵巻を取り寄せて写本を作成し、手元に残す行為は、晩年まで続けられていた⁵。

後崇光院はこれ以前にも列影図を披覧している。『看聞日記』嘉吉三年（一四四三）五月二十五日条には「諸家似絵一卷、（綾小路）有俊朝臣持参、中院大納言（通淳）感得云々、此絵持明院殿宝藏絵、伏見殿御絵と奥書二あり、御使物持来買得云々、執柄以下諸家有数輩、」とある。「一卷」に「執柄以下諸家」を重視するなら、天皇は含まず、撰関とならなかった諸大臣が含まれていたことになり、宮内庁三の丸尚藏館所蔵「天子撰関御影」のような撰関と大臣とが別巻になる構成とは異なるものだろう。家伝来ではなく購入したところの列影図が、同じ村上源氏の一族間で贈答に用いられたり、譲られたりすることも考えうるが確証はない⁶。

* * *

天皇・撰関・大臣らの似絵を連ねた列影図巻で、鎌倉・南北朝時代までに成立した原本として扱われる作例は、宮内庁三の丸尚藏館所蔵「天子撰関御影」【14頁】、京都国立博物館所蔵「公家列影図」、徳川美術館所蔵「天皇撰関御影」の三点で、二条良実は前二点に含まれる。『集古帖』所収図は、面貌は相通じるが、その姿態（「公家列影図」では背面を見せている）や足先を描くことから、この二本とは別系統の図様とみなせる。

江戸時代以降の写本・模本と見なされる作例では、「天子撰関御影」の転写本や増補本が多いものの、異なる系統の画巻も若干ある。代表的な一つは京都御所東山御文庫本で、これについては以前、簡単な紹介を行ったが⁷、その際に「天子撰関御影」コロタイプ複製の解説冊子の確認を怠り、諸本の紹介を見落したのは失考であった。東山御文庫本「勅封一三九一一一〜四」巻子四軸は、下記の構成となっている（陽明文庫にも（一）〜（三）あり）。

- (一) 「天皇似絵」。外題「似絵」。鳥羽院〜後醍醐院に続いて、後光厳院（「天子撰関御影」ではかつて錯簡していた）・後円融院・正親町院・陽光院・後陽成院を含む。

(二) 「大臣似絵」上巻。外題「似絵（大臣）上」。大臣影一。宗忠〜忠経。撰関になった者も含めて、任大臣順に配列する。

(三) 「大臣似絵」下巻。外題「似絵（大臣）下」。大臣影二。道経〜冬忠、および足利義満・義持・義教。撰関になった者も含み、(二)の続く歴代大臣に室町將軍三代を付加したもの。

(四) 外題「似絵」。大臣影三。通雅〜兼季の大臣のみで、家経以下の撰関は不在。

二条良実は(三)に含まれ、『集古帖』所収図と笏を持つ腕の形が同じで、外題にも相通じるところがあり、同一祖本に由来する。東山御文庫本には奥書がなく、後陽成院を含んだ全体として同時期の成立で、江戸時代前期頃の作例となるから、『集古帖』所収図の直接の祖本とはなりえない。

東山御文庫本(三)との関わりで重要な模本に早稲田大学図書館所蔵「大臣影」【チ041083】がある⁸。【12頁】。冒頭の道経の銘と体の一部が欠失した状態を写している。奥書に「右大臣影一卷者、大御番石川七左衛門、從京都所携古写本也、文化六年（一八〇九）五月廿五日伝模畢、文晁」とあり、冒頭に「写山楼画本」（谷文晁一門の粉本・模本類）の印記もある。洋風画を描く石川大浪が京都からもたらした「古写本」を、谷文晁が転写したものであるが、その複製本にも見受けられる。白描の精緻な写しで、詳細な色名注が加えられている。ただし注記の均質さや衣の文様は転写的である。文晁一門における「古写本」の意味を確定し難く、早大本は間に模写を含む複製本のようなだが、本格的な彩色と袍の文様が描かれた画巻の存在を示す資料となる。この「大臣似絵」下巻は、末尾に付加された足利將軍三代、とくに嘉吉元年に殺害された義教の画像をどう理解すべきかも論点となる。衣紋線は必ずしも正確に転写されないだろうが、『集古帖』所収図と異なっており、早大本が宝徳本もしくはその親本を写したのか判断できないものの、近しい作品と考えられよう。

『集古帖』に貼り込まれた写しは、後崇光院が模写させて手元に残した列影図の存在を浮かび上がらせ、それが中世成立の画巻としては現存しない系統であることを示している。引き続き関連史料の探索に努めたい⁹。

註

- (1) 簡単なものであるが、藤原「歴博けんきゅう便七二 共同研究『聆涛閣集古帖』の総合資料的研究」(『歴博』二二六、二〇一九年)にて現段階での理解を示した。「集古帖」は国立歴史民俗博物館のEzakiサイトより全図がWeb公開されている。
- (2) 宮島新一「宮廷画壇史の研究」(至文堂、一九九六年)一四五・六、二八四頁、高岸輝「室町王権と絵画」(京都大学学術出版会、二〇〇四年)二二二頁。
- (3) 後奈良天皇皇子で曼殊院門跡の覚恕(正親町天皇の兄弟)は、『言継卿記』で「曼殊院宮」と表記され、「入道宮」とは区別されている。
- (4) 上野学園大学日本音楽史研究所編『陽明文庫蔵舞絵(舞楽散楽図)・法隆寺旧蔵措鼓』日本音楽史料叢刊一、思文閣出版、二〇一六年。
- (5) 他に『天稚彦草紙絵巻』の模本の一つに文安五年十月の奥書があるといい、宝徳元年九月には東寺から『弘法大師行状絵巻』を借り出している。藤原「東寺本『弘法大師行状絵巻』の披覧記事」(佐野みどり先生古稀記念論集刊行会編『造形のポエティカ』青簡舎、二〇二一年)五四〇・一頁。
- (6) 宝徳二年に中院通淳は六十二歳で権大納言を辞し、息子の左中将通秀(二十三歳)が参議に任じられ、久我通尚は文安元年に任権中納言、同五年に任権大納言、宝徳三年には二十六歳で、その父清通は前内大臣(五十九歳)であった。後年となるが、通秀は通博(通尚)の息の通世を養子に迎える。
- (7) 藤原「京都御所東山御文庫本『大臣似絵』覚書」(田島公編『目録学の構築と古典学の再生』(二〇一一年度報告書)『科学研究費補助金研究成果報告書』二〇一二年)。
- (8) 「天子撰関御影」解題(宮内庁書陵部、一九六八年)。平林盛得「天子撰関御影と公家列影図―所収人名を中心として―」(『新修日本絵巻物全集』二六、角川書店、一九七八年)では割愛された情報に属する。
- (9) 早稲田大学図書館より画像 Web公開。同館には同書名の『大臣影』一卷「ナ0406312」も所蔵されるが、これは宮内庁三の丸尚蔵館本の写しである。
- (10) この他に二条良実の似絵が取り込まれたと思しい作品に、金刀比羅宮所蔵『なよ竹物語絵巻』がある。若杉準治「似絵」(『日本の美術』四九六、至文堂、二〇〇五年)七八頁、藤田紗樹「なよ竹物語絵巻」と似絵の関係をめぐる考察」(『千葉大学人文社会科学研究』三四、二〇一七年)・同「なよ竹物語絵巻」の図像表現と制作背景についての試論」(『美術史』一八六、二〇一九年)。詳述は機会を改めるが、藤田論文は物語絵巻への似絵の適用を提示するも、詞書のみが残る似絵の行事絵『承元御鞠記』の存在にも留意すべきだろう。大画面への改作と思しい『実躬卿記』徳治二年(一三〇七)五月四日条も参照。

【謝辞】早稲田大学図書館には原本調査の機会を賜り、図版掲載には所蔵各機関のご高配を得た。記して謝意を表す。



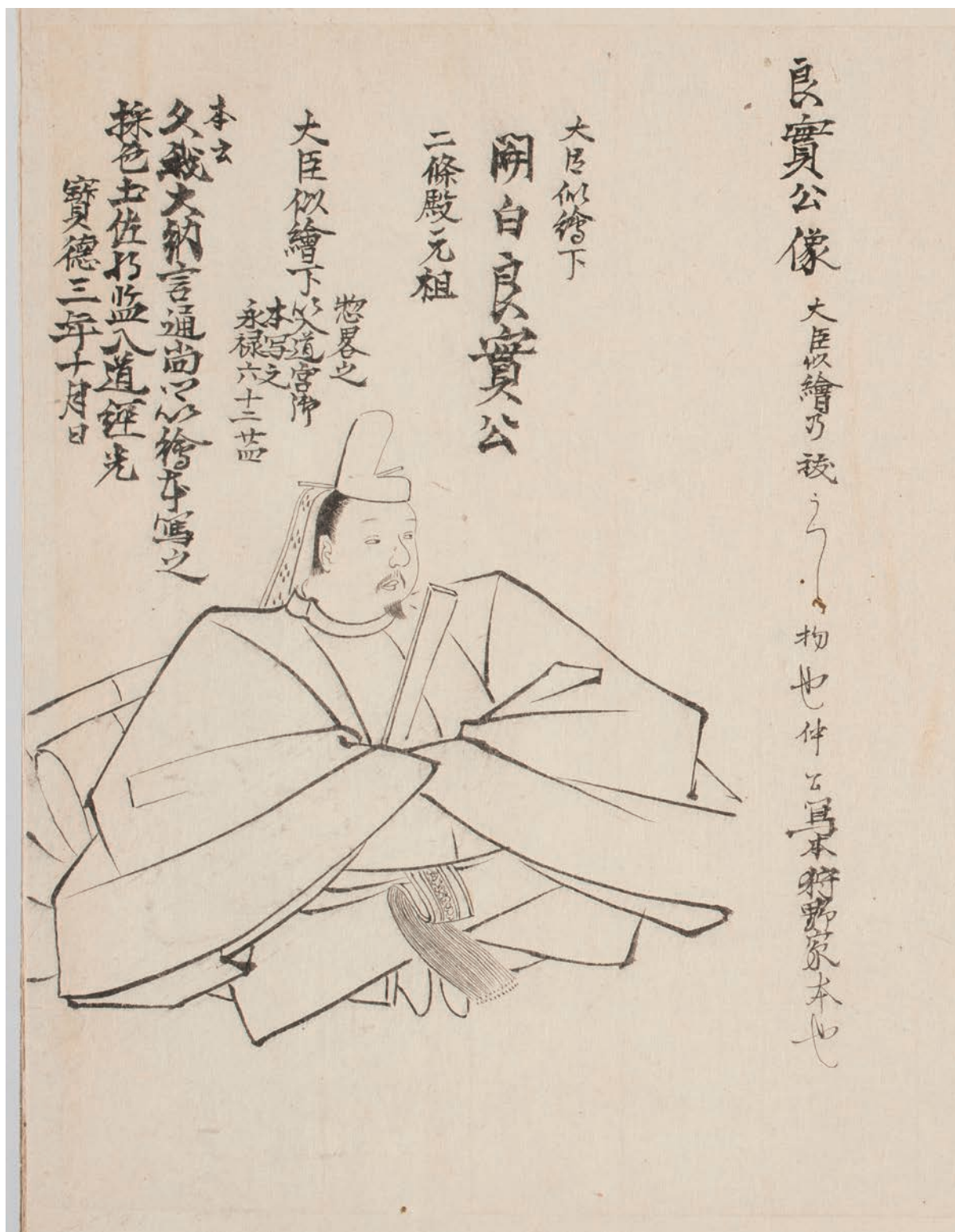
右大臣影一巻者大御著石川七九衛門後京都所撰古
 萬本也文化六年五月廿五日傳喜早
 五長



早稲田大学図書館所蔵『大臣影』[ナ 04-01023]のうち「関白良実公」

奥書

印記



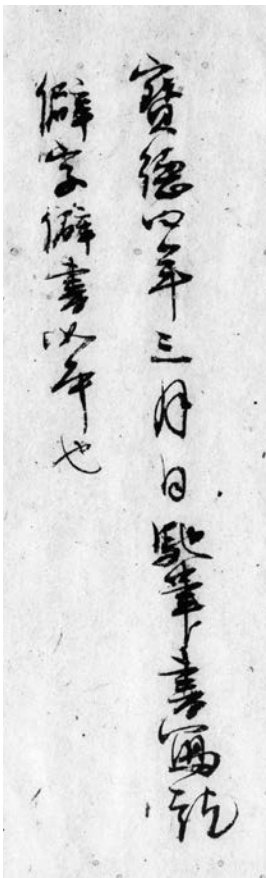
国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』肖像 [H-1660-7] のうち「良実公像」
(khirin <https://khirin-a.rekihaku.ac.jp/reitoukakushukocho/h-1660-7> より)

本誌をご参照ください。

参考：国文学研究資料館「新古典籍総合データベース」

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100235192/viewer/95>

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「天子撰関御影」撰関巻 福光園関白（二条良実）（コロタイプ複製より複写）



宮内庁書陵部所蔵『粉河寺縁起』[伏・479] 奥書

陽明文庫所蔵「舞絵」奥書

サントリー美術館所蔵「放屁合戦絵巻」奥書

本誌をご参照ください。

本誌をご参照ください。

参考：<https://www.suntory.co.jp/sma/collection/gallery/detail?id=642>